

“ チェンジ ” の年でした

会場・作品のサイズ・配置など

銀座・鳩居堂、さらに東京交通会館内へと長年の余場であつた京セラ・コンタックスサロンから離れて、新会場で催された「医家写真展」は、初参加の5人を含む22人から41点が出品された。この中から最優秀作品に新井隆彦先生の「飛行機雲」が選ばれ、懇親会の席上で他の賞と併せて表彰状が竹腰部長から手渡された。なお今回も作品紹介を兼ねての寸評を、新井先生から以下のよつに寄せでもらつた。

評 新井 隆彦

恒例の医家芸術クラブ写真展ですが、今回は色々な意味で変わりました。先ず御承知の通り有楽町の東京交通会館・コンタックスサロンでの写真展を実行することが今回より出来なくなりました。写真業界の大きな変化にも依るわけですが、当クラブの写真展も開催が不可能の状態となりました。このため竹腰、岩瀬、雨

委員の方々が文字通り東西奔走され、よつやく余場が見つかり一月十九日より二十五日まで新宿の「ヒューフォトギャラリー新宿御苑」で開催することが出来ました。

この間、委員の方の「苦労は大変なものであったと伺っております。ついでながら私、新井隆彦は体調不振により昨年をもつて委員を辞任致しましたが、写真評は是非と言われましたので、今年も紙



第39回 医家写真展を回顧

面を汚すことになりました。失礼の段有るかと存じますがお許し下さい。

さて新しい会場は北新宿の通り新宿御苑のすぐ近くで交通の便もさほど悪くありません。しかし何分にも会場が従来に比して狭いものですから必然的に写真の大さき枚数、配置など昨年までとは異なります。展示写真の大きさも半切に致しました。また配置も一つの部屋に纏めました。考えよつによつては「ちんまりとして移動しないで全作品を見る事が出来るわけです。

さて十一月十九日の午前は、平日ですから当然医療関係者が会場にお出でになるのは至難なことです。私は開会直後に参りましたが、一般的熱心な方だけが見えました。

それでは例年の通り出展者の作品を私独断の批評で述べてみます。今回は2点展示された方も私の独断で写真掲載は一人一点（＊印）にさせて頂きました。

作品は先ず部屋に入つて直ぐの壁面か

いばりのアイワエオ順に写真が展示されておりました。

先ず私は新井隆彦の写真です。「屋

根の「ウノトリ」と四方八方に整然と並んでいる「*飛行機雲（ヤースリ）」。

数年来歩行が困難の為、今年の春もヤ

スリバークルーズ十日間、船上で撮したもので、特に空一杯広がる格子模様の飛行機雲は、晴れた北欧でこそ見ること

が出来たと思います。

岩瀬光先生の作品は「若葉の輝き」、「*寺院と中央火口」でした。とも



寺院と中央火口 岩瀬光

岩瀬先生の得意の広角レンズ使用による傑作です。若葉の輝きは文字通り若葉の林を直略する」となくレンズを絞り切つて鮮明に写されておられ、またそのため奥深いところで風に揺られているのが見え、一際新鮮さを感じました。

また十ヶ海の「寺院と中央火口」の作品は、深い青色の海岸で空には何とも言えない美しい雲が所々に掛かり、広角

の効果が遺憾なく撮されています。

大武秋笙先生　先生は2枚とも奥多摩のものですが、緑の山に真っ赤に塗られた橋が新鮮な色合いを大胆に撮されました。もう一枚はドラム缶橋として有名な「*新緑の奥多摩」で「緩やかな力」を描いた質素な橋の手前に木の枝を配したのが成功していました。静かな湖面の情景が映えています。



新緑の奥多摩　大武　秋笙

大武省三先生　大武秋笙先生の弟さんですが特に花の写真で優れており今回も真紅な花のアップ「*睡み」が出されました。例の通り単に花の撮影ではなく花の生命を映し出しています。暗いバックに新鮮な赤の花、そして活き活きとした緑の葉、総てが日本間に飾りたい写真です。



陸み　大武　省三

大森佐一郎先生　「*早苗田」は如何にも田植え直後の風景らしく広い田の水面にまだ頼りない苗が並んで風にそよいでいます。何気ない風景ですが恐らく



早苗田　大森　佐一郎

もう一点の「家路」は雲の切れ間から太陽が海上を照らしその光の間を帰り船が通り抜けて行きます。花は静、帰り船は動の写真です。

都会から行つた人にはつかない風景でしょ。それは地元の方が愛情を持って毎日田圃を見でおられるから親しみのある風景になつたのと思います。

もう一点の「背伸びする春」は面白い角度で生えた花を撮りました。通常では思いつかない様な狙いです。お陰で首を長くしているかの様に春の到来を待つてゐる雰囲気が良くあらわされていま

す。木村典子先生 2点とも英國の湖水地方の作品です。私自身がこの地方のベンシヨンなどに宿泊して朝夕撮影出来たひときわえておりますので、実行された先生の幸せが溢れています。勿論沢山の写真を撮られたと思いますが、特に湖水の色が深く、且つ草むらに羊が点々といふ「*湖水地方」の方が美しく良い作品と思っています。

この地に泊まつたりどちらを向いても絶になりますが、うつかりすると場所の良さに感激の余り、撮影そのものに一工夫を忘れてしまつことがあります。

齊藤三朗先生「*マガモも紅葉狩」
一点が提出されました。静かな池でしょ
うか。秋の雰囲気がよく表されておりま
す。どつも主役は見事な紅葉の様に感じ
られます。惜しまなく紅葉の良さを感じ
させられます。



マガモも紅葉狩 齊藤 三朗



バルト海 夕景 佐々木 正

佐々木正先生 「女王」と「バルト海 夕景」の作品が提示されました。「女王」は佐々木先生好みの美しさで真ですが良くある単に田鳥がいるだけの風景ではなく、よく見ると水濠の池で田鳥が前に進んでくるのが判ります。シャッターハンクレーリーの1/500です。残照はどうか日本しまして、「*バルト海 夕景」の写真は

強烈なまでに美しい夕焼けの海岸風景です。空が真っ赤に染まり海の手前にはやや暗い海岸の家々が見えます。バルト海でのクルージングでの撮影でしょうか。平和と争乱が同居している東欧の一齣です。

私はトレーラーの花は存じませんが良い色に出ています。折角ですから緑の花のレントが合つていれば、尚良に写真になつたでしょ。

白矢勝一先生

「亡びの美」と「樂

しいひと時」の2点です。前者はどような情景で撮影されたか判りませんが、何れにしても理解しがたい様なマスクの被写体に埋もれた美を表現されたのか想像するばかりです。

「*樂しいひと時」せひいか外国のレストラン前の様です。店の前には外で待つてらるワンちゃんがいます。ネオング明るくとも良じ想い出になるでしょう。ただ下の横断歩道は入れなかつた方が纏



残 照 佐久間 文子

佐々間文子先生 「*残照」と「トレー」の1/500です。残照はどうか日本しまして、「*バルト海 夕景」の写真は

まるのでは。
白矢泰二先生 「あなた誰」「優雅なお昼寝」の二点です。どちらも身近な猫ちゃんです。「あなた誰」は動物の本能に基づき不審なものには疑いの目を向けます。そこには少しの愛憎もあります。

白矢智靖先生 「マネキンの見る空塔」「空を見上げて」が展示されています。青空に大きな空塔が立っています。アメリカ辺りの都市での撮影された世界にいる猫ちゃんです。手も足も伸ば

して腹巻きをしたお腹も伸び放題です。何も疑つ必要も無く正に幸せにどっぷり浸かっている微笑ましい作品です。特に家族に愛情が感じられます。

白矢智靖先生 「マネキンの見る空塔」「空を見上げて」が展示されています。青空に大きな空塔が立っています。アメリカ辺りの都市での撮影された世界にいる猫ちゃんです。手も足も伸ば



楽しいひと時 白矢 勝一



優雅なお昼寝 白矢 泰三



空を見上げて 白矢 智靖

ものでしょ？が。戦争モテモも関係無い地方都市の一齣です。空塔は判るのでそれが見えていいマネキンがどうも私は判りません。マネキンに意味があるなり写真の中で力強く表現されたら面白い作品になつたとおもいます。

「空を見上げて」も同じ場所で撮影されたものだと思いますが一寸方角を替える

と画面の雰囲気が全く変わります。「ち
らは子供が何をに向いて見ているかは判
りませんが、何か物語が隠れています。
何を見ているのか続きを見たくなります。

関口直男先生 「*水遊び」「夕夏」



の二点です。前者は「公園の林に囲まれ
て噴水が勢いよく水を噴き上げており、
周りに子供が水をかぶつて遊んでいます。
誰にも文句や注意を言われない、まさに
子供だけの世界です。『夕夏』は日本の
風景の中で口が沈むのです。空には適

当な雲がありフィルターの役目をして太
陽が綺麗に表現されました。暑かった夏
に絞り、光も良い「*早暁」が全体とし
て纏まって作品に素晴らしいと思いま
した。

高橋俊一先生

二点とも山の写真で
す。登山に縁のない私にとっては「写真
の価値よりもここまで登るのでは」とて
も重労働なことじび受け止めています。
どちらも山頂を望んで天気も良く今日の
成功を祝福しているかのようです。

個人的には一つの山で

絞り、光も良い「*早暁」
が全体として纏まって作
品に素晴らしいと思いま
した。



早 暁 高橋 俊一

鷹橋靖幸先生 「光
の芸術」「紫陽花」が展出
されました。「*光の芸術」
は、イルミネーションの
動きの中で一度適切な時
間で切り取った写真な
らでは表現できない作品で、写真歴の豊
かさが偲ばれます。同じ内で入れる構図
か、またシャッター時間はどう「苦労様
でした。」「紫陽花」は一度見見頃な紫陽花を真
正面から取り上げられました。梅雨の晴
れ間ですがどうなくしつとり感が程良

く表現されていました。

竹腰昌明先生 「波の音」 「アラモアナタ景」 の2点でした。 「*波の音」 は写真展の案内葉書に使われましたので皆様御承知かと思います。荒々しい石場で日焼けした若い女性が思いきって伸びをしています。やらせではなく自然の光景だそうです。非常に鮮明で特に岩の表面



光の艺术 鷹橋 靖幸

の質感が良く出ています。

「アラモアナタ景」 は広く波静かな海岸で日没を迎えました。空は快晴でちぎれ雲の間から大きな太陽が見えています。手前の海岸には椰子の林が見てて画面を安撫させています。



浪の音 竹腰 昌明

逸見和雄先生 「鳴子峡」と「*晚秋」です。前者は天トの絶景鳴子の秋景

色です。画面一杯に紅葉の林を中心とした景色が広がり空に向かって遙かに橋が見えます。温泉にでも入りながらこの天下の絶景を眺めるのも日本ならではの楽しみです。後者は山の尾根伝いに一人林の中に進えて行きます。気候も良く静かな山の中を一人歩くのは大変に贅沢な事です。私個人的には物語のある晩秋が良が



晩秋 逸見 和雄

つたと思します。

本村美雄先生　田下写眞道にはまり込んでいる先生です。なごりとともに恐れず写眞に突入しています。その様な訳で時々驚くほど傑作を物語られます。今回は「*寒緋桜とメジロ」「カモメ」の2点でした。前者は一面の淡い桜色をバックに見事なメジロが一羽見えます、ピ



寒緋桜とメジロ　本村 美雄



田園アート　三上 忠英

ンも艮くまるで有名画家の絵かと思つぱりです。やはり数を多く撮影されている事が傑作を生み出す源流なのでしょう。後者は「カモメ」でロープに一列に並んだカモメの集団です。面白可愛いですが手前から回りに向かっての鳥の集まりは何処までパンツを合わせ得るか判断に迷います。

二上忠英先生　「*田園アート」以前にも何回か出されたモチーフですが市役所の五階から何方でも撮影出来るそうです。予め設定されている撮影でも天気 時間 画角 自分の高さ又当然田園に描かれたもの（絵）にもより決して同じ写眞は撮れません。今回はそれらの総ての条件が揃い成功しました。知らない方が見たらどうのよつにして撮影されたのか質問されるでしょう。タネを明かせばなる程と思われるでしようがどんなに設定が良くてもの様に傑作になるとは限りません。

　　村上 泰先生　「*紅花カルニア」と「古都のモダニズム」の2点が展示されました。私は花が美しいのは判りますが花の名前については全く存じません。ただこの花の写真について申しますと明るく清楚な感じが致しました。枝振りも面白いと思います。ただ撮影するとなむと難しそうですね。

「古都のモダニズム」の方はフランスの

古都ディジタルでの撮影とのことで、非常に新鮮で芸術的だと思いま

すが正直の所、題名通りモダニズムな内容の写真で私はどのよう判断して良いか迷つております。何にしても各曲が美しいあるいは新鮮で面白い感じられれば良いのではないか。



紅花カルミア 村上 泰

鹿舞 矢崎 定造



矢崎定造先生 お祭り「眞の大家」です。今回は「*鹿舞」と「鬼劍士の舞」(本号の表紙)を出されました。鹿舞いは街角での踊りで町の中での踊りのスタッフです。「鬼劍士の舞」は正面で踊りの教科書の様に完璧な踊りをものにしております。申し分のない満点の作品です。

ただ何時も感じるのはお仕事を休んで祭りを撮影する為、全国を飛び回っていますが都会からいきなり現地に飛んでいくて、あのよつと最高の場所に陣取り、最高のチャンスを撮られる秘訣は何

表紙の言葉

矢崎 定造
(甲府市中央)

「眞は岩手県で伝承するシンシン踊りで、「一人立獅子」とも呼ばれ、その芸能は獅子舞とは区別されていて関東地方が宝庫、特に埼玉県や群馬県に多く伝承されています。岩手県で伝承されているシシ踊りは太鼓系獅子と幕躍系獅子の2種類のみでこの2種類の芸能は伊達領と南部領の藩境によって伝承地が区分されているのも特色であり、藩境のまち北上市には他領に伝承していた種類のシシ踊りが境を越えて伝承しています。

この写真は「北上・みちのく芸能まつり」の一こまの幕躍系獅子を、大勢の観衆の中を分け入り、ISO感度を3200に設定し、撮影した写真であり、何時までも心に残る写真です。

でしょうか。ただ驚きばかりです。

山崎律子先生 「* サバンナの親子象「サバンナの親子キリン」の2点です。

キリンの方は敢えて下を切り詰めて広いサバンナを表現しております。象の親子

は画面にそれぞれが歸く收まり微笑まし

い写真になりました。サバンナの撮影は兎に角動物を探す為に待つ事から始まり



サバンナの親子象 山崎 律子

ます。私が以前にお話した先生は、自分で車を手配して自家製の三脚にカメラを作成するようになりました。

[写真を写す事は製品難しくありませんでしたが、現像にはかなりの工夫を要しました。ながら安直に動物を撮して冷や汗ものでした。

カメラ紀行 矢崎 定造

私は慈恵医大卒（526）後、1年間のインターンを経て、大学の耳鼻咽喉科に入局致しました。学生時代より耳鼻咽喉科を志しておりましたので、すんなりと入局する事ができました。

入局した頃から、壁紙に筆またはマジックペンにて書いて表示していた時代は終わり、スライドにて学会発表の時代になつておりました。私は入局1年先輩の指導のもとで、スライド係りを命じられました。

今迄余りカメラに触れていなかつた私でしたが、スライドを作るよつになつてからカメラに興味を持つよつになり、すべての仕事が終わつたあとの自由時間を

利用、医同員の依頼を受けてスライドを作成するよつになりました。

[写真を写す事は製品難しくありませんでしたが、現像にはかなりの工夫を要しました。記憶があり、特に大変だったのは、学

会1週間位前から当直を残してすべての医同員が帰宅してからのスライド作りで、帰宅が深夜に及ぶ事が毎日のように、時には医局に当直医と一緒に寝泊まりする事がありました。

このようにカメラに触れる下地があり、当時晩年になつて、暇さえあれば日本中の祭りを中心にして、カメラを持ち歩く自分の姿を想像する事は出来ませんでした。昭和35年、現在地に耳鼻咽喉科を開業してより、数年を経て甲府市医師会の理事に選出された頃、当時の甲府市の医師会長の篠原先生の発案で、医師会の会員、家族及び会員の医療機関に勤務する従業員の作品を展示出来る文化芸術祭を立ち上げました。

私も委員の中に加わっておりました

で、なにか出品しなければと勧めたのですが、特に優れたものがない、思付いたのが、約2~3ヶ月前、休日で家族と共に訪れた甲府市北部に位置する十代田湖の西側の山上に沈む太陽を湖面に入れで、何気なく撮影したものでした。

当時の一眼レフカメラは、今のカメラのように全自動で写せるものではなく、マニュアルで絞りを決めて、シャッター速度は、表示の中間点になるように調節し撮影したところ、期待以上の作品となり提出する事が出来ました。この写真は好評を得、その当時の私の「写真技術」ではまた同じような写真をもう一度撮つて欲しいと言わても不可能なほど出来の良い写真がありました。

これを機会に、休日となれば、家内と連れ立つてカメラを片手に被写体となるものは何でも撮つてしまひました。家内は最初のうちは、私のカメラ助手をしておりましたが、助手ではあきたらなくて、私の使い古したカメラを駆使して写

真を撮るようになりました。

しかし、当時は一口中診療していたものですかが、早朝撮影し、血中で帰つてから診療といつのせ、身体が続かない事を考へ、テーマは最終的には祭りを選ぶ事にしました。祭りは多少の時間のずれがあつても、スケジュールに従つて進行するので、時間に制約される私にとって、祭りの写真はもつとも都合の良い撮影テーマと考えて、専念するようになりました。

更に祭りの催行日が休日である事が、不要不可欠の条件で、撮りに行きたい祭りがあつても、休日に催行されないものはないはずも除外しました。祭りの被写体は動きのあるものである事が、瞬間に写しだすと思いつ、若く時には、待つて写し、やつ過ごしては追いかけて祭りの先頭に立ち、「写真」としておつまし、が、老齢になつた今では、待ち伏せ専門となり、バックの良さを選び、其処で祭りの行列が過ぎるまで、シャッ

ターを押し続ける方法を試みてあります。

祭りの写真を撮り始めてより、20数年がたち、この間、数回地元で祭りだけの写真展を行い、見て頂いた方々より好評を得ました。祭りの写真の撮影は東北の四大祭りを含めて数多く撮つ歩き、次第に県、市その他の写真コンテストに入選するようになりました。かなりの量の祭りの写真が出来上がってから、周囲より写真集を作るよう勧められました。資料の収集と経費の面でも大変な負担とは思いましたが、一念発起で、「祭りは踊る」の写真集を完成させました。

作り終わった時はその達成感でしばりは放心状態であります。祭りの写真を撮る事によって、その地域住民の取り組み如何によつてその成功が左右される事を知りました。祭り関係者だけの盛り上がりでは、祭りは成功であつたとはいえなく、子々孫々まで続けて行くには同じ行事の模倣であつてはならなつと思われます。

われます。

次々と新しい構想を生み出し、地域住民の直接間接にかかわらず、総力を挙げて祭りの行事に参加する事が必要である感じで参りました。地域の人々が進んで参加出来る雰囲気が生じてくれれば活性化に繋がり大勢の観光客を呼び込む事が出来ると思います。

現在は朝日新聞社の全日本写真連盟関東本部副会長として、地域の写真文化発展のさせやかなお手伝いをさせていただいております。

出品に寄せて 大森佐一郎

本年の「写真展」に出品した一点は現在生活する住まいの近くの小屋です。二十七年間続けた開業医生活にすっかり疲れ果てて逃げるよに大阪を離れました。身体的には勿論のこと、精神的な疲労感は限界に達しつつあるほど蓄積しておしました。慣性で続けることでは不可能ではないかと感じられました。

厳冬の一月 北海道に転居したしまし

た。雪の下に埋もれてしまつて小さな小さな家は原生林の中になります。ブリザードが吹き荒れる夜には裸樹とともに一晩中揺れます。

風が去り、重い雲の中から陽光が現れると雪面が光り輝きます。屋根の雪は雪崩れるように屋根を滑り落ちます。落雪の音は雪鳴るのように室内に鳴り響きます。吹き荒れた北西風が残した雪面の風紋にはキタキシネやワサギの足跡が走ります。

丘陵に上がれば、石狩平野が眺望されます。そのなかを石狩川が悠々と流れ、沈む西日に光ります。積丹半島は黒々とした山塊となり、日本海に突き出します。

深い霧の朝が続くといはゆるべくます。そのなかを石狩川が悠々と流れ、沈む西日に光ります。積丹半島は黒々とした山塊となり、日本海に突き出します。

ない春の寒さです。

春の気配をはつきり感じ始めるのは四月も下旬を過ぎる頃ではないでしょうか。黒い地面から「クロッカス」が咲き始めます。けなげにも、逞しく見えてその姿を見ると感動します。

絨毯のよつて散り敷いていた秋の枯葉が、雪の下で「冬を過」し土となづとす。その間からいかにも頼りなげな細い茎を伸ばして、思いのほか大きな紫の花弁を持ち上げます。

ゆっくりと裸樹に春の芽吹きが始まる頃、雪どけの透明な水が水路を走り始めねど、フキノトウは姿をあらわします。瞬く間に成長する草丈は春の口に向かい「背伸び」をしてくるよつて見えます。

冬の間、骨だけ残されていたビールハウスに、ビールが張られると、春の農作業の幕開けです。画面はふとどじまでも広がり所々にそのビールハウスが点在して、中では作業が始まられて

います。名残の雪を残しながら、黒い田
が現われます。すると、ある朝、水の張
られた田に早苗が細いつす緑の葉を描ひ
す光景が広がっています。人の気配を感
じなかつた広大な水田は、ある朝、「早苗
田」に変わつてゐるわけです。

北の国の四季の変化は鮮やかです。本
のページをめくるよつて、回り舞台が回
るよつて、突然に訪れます。この透明な
美しく烈しい四季を感じて過ごし
ながら、ゆづやく疲れが消えつつあります。

開業医の生活に疲れていたせいではな
かつたのかもしません。都市に疲れて
いたのでしょうか。いや、都市という環
境に生活する私の中の、都市的なものの絶
えず自己主張し続けねばすまない)に疲
れていたのかもしません。

「これからは、北の国の生活を『眞に』表
現して発表できればと考えております。

和氣藹々と高度な技術を伝えあつ 懇親会

懇親会は11月23日(祝)午後、近く
の日本食店「膳」で、ランチタイム貸切
りで開きました。参加は出品者22人のうち
10人といふ人が3人、新入会員の石
山先生、さらに洋楽部秋野仁志先生、美

術部安田修一先生と和子夫人、堀内カラ
ー清水課長、事務局から西田明子の合わ
せて19人です。

先ず写真展会場に集合し、懇親会会場



竹腰部長から賞状を受ける新井先生⑤

へ移動。やや体調不良な新井隆彦先生は
他の部員のこの迷惑になつてはと少し早く
会場を出られますが、一同の到着時には先着
していた新井先生と竹腰部長ががつちり
握手。

さてそく、次頁の別表のように最優秀
作品の新井先生ほか、優秀作品の諸先生
をはじめ、今回新しく設けられた技能賞
や構図賞などの表彰状が竹腰先生から手
渡されました。

カメラは本当に奥が深い趣味

その後、写真展に出品された美術部部
長の田矢勝一先生の好意で、個人所有
のノートパソコンとプロジェクターを拝
借。お陰様で、出品作品のみならず審査
落選した作品も命めて壁面に投影しなが
ら皆さんで鑑賞。自己紹介がて、一人
ずつ作品を解説。撮影秘話、苦労話など

披露願いました。

老若男女、写真撮影の趣向は異なるところからわらず、医家と真展を接点に仲良く交流、「他者の良いところを褒め、認め

< 各賞リスト > *は懇親会出席者

最優秀賞 *新井隆彦

優秀賞 *斎藤三朗、*佐々木正、高橋俊一、*竹腰昌明

A P S賞 関口直男

お祭り賞 *矢崎定造

技能賞 *岩瀬光、大森佐一郎

構図賞 大武省三、木村典子、鷹橋靖幸、逸見和雄、村上泰、

*本村美雄、白矢勝一

田んぼアート賞 *三上忠英

ナチュラルアート賞 *大武秋笙

新人賞 白矢泰三(弟) 白矢智靖(子) *佐久間文子、山崎律子

め合つ。和を最優先する「写真部の伝統」が、根づいているからでしょう。本村美

雄先生が佐々木正先生の助言に対し、

話された通り「大先生が(長年苦労して編み出した)「ソシや技を惜しげもなく」教授下さる」と、優秀競争や批判がなく

「これはどう撮ったの」「そういう風にしたんだ」「素晴らしいね」「こうした

らもつといいかもしれない」等の闊達な発言が笑いとともに飛び交い、和やかな

中にも、よりよい技術や撮影方法の意見交換が行われながら進行しました。

和やかなだけでなく、審査を担当していただいた堀内カラーネット課長も手話を

くほひ、「素人と思えない力量の方が多い」と驚いていました。

写真部はきつちり申込締切日や出品料振込口が遵守されます。これも竹腰部長

雨宮・岩瀬副部長を中心統制が取れている証。今回は未出品でしたが、大雨の冷え込んだ初日に雨宮副部長が来場、有難うございました。

デジタルカメラの開発・普及で、参入障壁はシャッターを押すだけと低い力メラ。しかし、この道具をいつ、どこで、

どう使いこなし、作品として仕上げ、楽しむか……カメラという魅力が好き、構

図に趣向を凝らす、光と影の妙を楽しむ風景・山・花・鳥など撮影対象をよく観察・研究し、その特徴の最も良の瞬間を捉える、旅行やイベントの記録として撮影する……人それぞれ取り組み方、楽しみ方も多種多様です。

家族や他の部との繋がりへ

今回の懇親会は是非お連れ様もとお願

いと思います。(眼科)
暫くのブランクを経て再入会させて頂きます。心が癒される自然の風景、美しい景観を切り取つて行きました

石井光子



(敬称略・前列左から) 岩瀬 光、矢崎定造、竹腰昌明、新井隆彦、斎藤三朗

(中列) 大武しな、石山英一、矢崎佳子、安田和子、安田修一、三上忠英、大武秋笙

(後列) 萩野仁志、佐々木正、本村美雄、本村香都子、佐久間文子

いしました。大武秋
笙先生と佳子様が
お隣様で会場が華やぎま
した。

また奥様のお話か

ら意外な先生の一面
も発見する一幕も。
他の部との交流の一

環として、洋楽部元

リーダー萩野昭三先
生の「子息たる先生

絵画を美術展に出品
されている安田修一

先生と和子様の夫妻
横浜から足を運んで

くださいり有難うござ
いました。

当クラブ会員はす
べての部に参加可能

ですでの 計画中の本年度の美術展で、
萩野先生他の「コンサート」に他部の方々もお越し頂いたら嬉しい限りです。
今後徐々にご家族をはじめ、横の部の繫
がりや交流が進むといいなと思います。

新入会の石山先生も法事を端折って作
品データをご持参頂きましたので皆様と
鑑賞させて頂きました。流石 竹腰部長
ご推薦者だけあって素晴らしい作品でした。
今年の秋の写真展の「出品をお待ち
しております。

最後に私へ慰労のお言葉と記念品を頂
戴しました。このよつなお心遣いに感謝
感激致しました。特に竹腰先生の奥さま
お手製の小袋は綺麗な縫の布で丁寧な縫
製が施され、もつたいくなくて使用出来ず、
今も眺め、手にするとあの時の感動が甦
ります。

連休の最終日にはわざわざご参加頂きました
皆様、お隣様で無事に懇親会を終了
できました。心より「本当に有難うござ
いました」。 (文責・西田 明子)